

他者とかかわること
- ブーバー『我と汝』を中心に -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター
谷口 菜々絵

他者とかかわるといふことは、いったいどういふことなのだろうか。この問いに答えを見出そうと、ユダヤ系の思想家たちは、独自の基盤に基づいて思索を巡らせ、思想体系を構築してきた。彼らの思想は、ユダヤの伝統的思想のなかで、ユダヤ人としてヨーロッパとの「対話」をめざすものであった。「対話」を重視するユダヤ系の思想家のなかに、マルティン・ブーバーという著名な思想家がいる。

本論文では、他者とかかわりについて、マルティン・ブーバーの『我と汝』と中心に、彼の著作を紐解きながら考察した。

第一章では、マルティン・ブーバーの生涯と、その思想の根幹となる我 汝・我 それについて考察した。ブーバーは我 汝に基づく共同的社会の構築を考えており、また、対話に基づく世界平和を願い続けた。彼の思想を支えるのが、我 汝と我 それという二つの根元語である。根元語を語るといふことは、それぞれの関係に入るのと同ーである。我 それは、相手を対象として認識する関係であり、それとみなした対象を一方的に、要素ごとに分解して考察し、利用する。一方、我 汝は、全存在的な関わりであり、一方的ではなく相互的な関係である。

第二章では、人間相互の我 汝に焦点を当て、対話の基本的構造や永遠の汝について考察した。対人援助における汝との関係にも言及した。言語の形をとっているか否かを問わず、全存在をもって汝に呼びかけ、そしてそれに耳を傾け、応答することである。対話的關係には永遠の汝の存在がつねにあり、根元語が語られるとき、永遠の汝によるはたらきかけも同時にある。対話的關係のなかで、自分の職業が使命であり天職であることを強く感じる。意図してやってくるものではないその瞬間に、その為されるべき「生の意味」がはっきりと眼前に現れる。そのためには、目の前の汝と永遠の汝の両方が必要なのである。

第三章では、人間が生きていくうえで、我 汝と我 それの二重性は避けられず、両方が不可欠であることについて述べた。

他者とかかわるといふことは、単に自己理解、他者理解という一方的な関係で片付けられるのではない。他者との関係によって自己が支えられていて、自己が存在している。我が汝と出会い、対話し、永遠の汝とも出会いを果たすときに、人間は汝に支えられているということを実感し、他者との関係がなくてはならないものであるという確証を得るのである。